

新型コロナウイルスは、いったいつになったら収束するのでしょうか。不安は募りますが、子どもたちが過度に不安になりすぎないように気をつけなければいけませんね。

考えようによっては、人類にとっては脅威でも、地球規模で考えたら悪いことばかりではないのかもしれませんが、詳しいことはよくわかりませんので安易にこんなことを言うべきではないのかもしれませんが、新型コロナウイルスの感染拡大以降、中国では、「車や火力発電所、工場などから排出される大気汚染物質の一つ、二酸化窒素（NO<sub>2</sub>）の濃度が劇的に低下している」という人工衛星による観測結果が公表されました。今すぐにも対策が必要な環境問題（気候変動）に対し、有効な手立てがなかなか見つからないなか、この新型コロナウイルスによって、ほんのわずかながら、猶予が与えられたと考えることもできるかもしれません。

先日の劇場ごっこDVDのなかでも、お伝えしたように、これからの子どもたちには、新型コロナウイルスのような未知の病気や深刻な環境問題に関しても、斬新なアイデアで未来を切り開いていけるように、「解のない問いに解を見いだせる人材」に育ってほしいと願っています。そのために、私たちはどんな保育をすべきかということについて少しまとめてみました。

インターネットやスマートフォンなどのメディア機器が高度に発達、普及した現代では、調べればすぐにわかることを一生懸命教えて覚えさせることよりも、実際に見たり触れたり、かかわったりして自分でいろんなことを見つけることのできる「直接体験の機会」を増やしてあげることの方が重要だと思います。また、様々な情報のなかから必要なものを選びとる力、それらを再構築して、新たなものを創造していく力などを付けさせていくことの方が大事になってくると思います。

私たち大人は、どうしても子どもを「教えて育てなければ」と考えてしまいがちですが、教えて育つものはほんのわずかしかなかったりしません。それよりも子どもたちの好奇心や意欲を大事にして、「自ら学んでいこうとする姿」を最大限に伸ばしていきたいと思っています。

例えば、保育者が「なんでも食べる元気な子に育ってほしい」と願ったとして、食事の場面で様々な指導や配慮をすることも大事ですが、まずは思い切り遊んで楽しい時間を過ごし、「お腹が空くような生活をおくること」に重点をおくようにする。あるいは描画活動、制作活動等においても、描いたり作ったりするための方法や技術を教えることも大切ですが、日頃から「描いたり作ったりしたくなるような生活」、「心踊るような体験」をいかにさせてあげられるかに重点をおくことが大切だと思うのです。

要するに、大人があらかじめ用意した「大人にとっての正解」を子どもに教え、身に付けさせるばかりでなく、子どもたちの好奇心をくすぐり、探求心や挑戦欲が湧いてくるような環境を用意することに力を注いでいきたいと考えているのです。そして、子どもたち自身の中から生まれてくる疑問や課題に対して、必要なときには支援しながらも、自分たちで答えを探していこうとする姿勢を大事に育てていきたいのです。「大人が教え育てる保育」よりも、「子どもが自ら育とうとする姿を支援する保育」が広がっていったらと願っています。

そのために、私たち保育者は、子どもたちの「できる・できない」よりも、子どもが「どんな気持ちでやっているのか」に目を向け、「子どもの内面に育っているもの」や「どんな関心が芽生えてきているのか」などを読み取る力、そこから次の活動を考えたり、環境構成・かかわりなどを職員間で話し合ったりして、いっしょに考えていく力をもっともっと鍛えていきたいと思っています。

もちろん、園内だけでなく、保護者の方々や小学校、地域の方々とも、子どもの育ちや園で大切にしてきたかかわりなどを伝えたり、話し合ったりする機会を持つなどして連携していくことも大切にしていきたいと思っています。

そして、なにより、子どもたちにはいろんな人とうまくつながりあって、「みんなの幸せ」を一緒に考えられる人に育ってほしいと思います。そのために私たち保育者は、子どもにとっても大人にとっても「そばにいて安心できる人」、「信頼できる人」でありたい。「しっかりと子どもに愛情を注げる人」でありたい。「目に見える力や姿」ばかりでなく、「豊かな心」を育むような保育ができる人でありたいと考えています。

もうすぐ園を巣立っていく子どもたちには、残り少ない園生活を思う存分楽しんでほしいと思っています。